

近世・近代に於ける「所天・良人」について*

羅工洙**
gsna@ynu.ac.kr

〈目次〉

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. 近世・近代文学における「良人」 |
| 2. 「辞書」よりみた「所天・良人」 | 5. おわりに |
| 3. 近世・近代文学における「所天」 | |

主題語: 漢語(Chinese), 呼称(Appellation), 所天(Shoten), 良人(Ryoujin), 変容(Transformation)

1. はじめに

近代における漢語や漢字表記を見ると、伝来の表記をしたり、或いは仮名で表記している場合が普通である。しかし、このような文字生活の中で、普通の漢字表記から逸脱した表記も少からず存在する。色々の宛字、中国本来の意味用法と異なる漢語及び漢字表記)、また近世以来の唐話学の影響による新しい漢語及び漢字表記がそれである。

本稿は、近世や近代の文学作品に現れている人称代名詞や呼称に関する漢語や漢字表記のうち、普通の表記と異なるものを中心にして考察するものである。人称代名詞や呼称は実に多様であるので、その歴史的展開を一挙に纏めるのはかなり困難である。和語の人称代名詞や呼称は漢字を伴うことが大部分であるので、漢字表記の性格についても考察しなければならない。

そこで、今回は呼称である「おっと」を表す漢語や漢字表記のうち「所天・良人」を集中的に把握しようと思う。普通の文字世界では、「おっと」の場合「夫」で表記したり「檀那・旦那」(だんな)を用いたりして、別段何の違和感なしに読者に意志伝達することができる。ここ

* 本研究は2015年度嶺南大学第1次校費支援により作成された。

** 嶺南大学 日語日文学科 教授

1) 漢語とは音読みであるもの、漢字表記とは本来は漢語であるが日本で訓または訓読みの振り仮名が付けてあるものをいう。

で「檀那・旦那」は仏教用語でもあるが、既に世人に「おっと」であることが広まっているので別段考察はしない。しかし、「所天」とか「良人」となれば、現代人にとってはかなり馴染まない言葉である。「所天・良人」は共に「おっと」を表す漢字表記である。

近代日本語における「おっと」の表記の問題については近藤瑞子²⁾の考察がある。明治期の作品には「夫・良・良人・所夫・所天・丈夫・本夫・武男」に「おっと」の訓があるのに対し、『八犬傳』には「夫・良人・所夫・所天・丈夫・牧妖」があるとしている。ここで筆者が注目しているのは「所天」と「良人」における意味用法である。近藤は「夫・所夫・所天」の意味用法について「夫…世間一般のヲット。所夫…架空のヲット。所天…正妻→尊敬すべきヲット」と分析している。また「良人」における種々の訓(おっと・あなた・ひと・うちのひと・ていしゅう・うち)を提示してもいる。が、全般的に見ると、分析する作品の少さと用例の不足により近世や近代における意味用法の全貌を把握しているとは言いがたい。

そこで本稿では、近世や近代の文学作品に現れている「所天・良人」がどのように用いられているのかを具体的に考察しようと思う。方法としては、まず、『漢語大詞典』と『日本国語大辞典』第2版(以下『日国大』と呼ぶ)を通して、日中両国における「所天・良人」の意味用法と歴史的流れを簡単に見る。それから、日本の唐話辞書や漢語辞書にはどのような意味が與えられているのか、最後に、近世や近代の文学作品³⁾にはどのように用いられているのかを見てみたい。

この研究により、近世や近代における人称代名詞や呼称の漢字表記の一端が把握できる。のみならず、日本文学では中国の本来の意味用法とどう違うのか、唐話学の影響はあるのかなどの問題も理解できると思われる。

2) 近藤瑞子(2001)『日本近代における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房、pp.32-40

3) 今回調査した資料は、『明治文学全集』(筑摩書房)・漱石全集(岩波書店)・紅葉全集(岩波書店)・鏡花全集(岩波書店)・逍遙選集(第一書房)・荷風全集(岩波書店)、『明治初期翻訳文学選』(雄松堂書店)、『円朝全集』(巻1-8)、部分的には『鴉外全集』(岩波書店)、『内田魯庵全集』(ゆまに書房)・『露伴全集』(岩波書店)・『斎藤緑雨全集』(筑摩書房)・『蘆花全集』(新潮社)・『啄木全集』(筑摩書房)・『リプリント日本近代文学』(国文学研究資料館)・『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》』(大空社)・『新日本古典文学大系 明治編』(岩波書店)・『明治文化全集』(日本評論社)などを調べた。本稿で取り上げている用例数は、あくまでも現時点における調査結果であり、もっと調べれば当然変動はある。また、新しい用例の発見に伴う用例数の出入りもあるだろうが、論旨が変わるほどのものではないと思われる。なお最近オンライン上で「日本語コロケーション辞典テストバージョン」にも「所天・良人」の例が多くあるが、文が短い読みが提示されていないので、まだ資料としての分析はできない状態である。

2. 「辞書」よりみた「所天・良人」

「所天」と「良人」に関する基本的な意味を考察するために、『漢語大詞典』と『日国大』の見出しを見ることにする。まず『漢語大詞典』である。

- 【所天】 舊稱所依靠の人。(1)指君主或儲君。《後漢書・梁竦傳》。晉陸机《謝平原内史表》。唐顏真卿《馮翊太守謝上表》
- (2)指父。晋武帝《答群臣請易服復膳詔》。宋方勺《泊宅編》
- (3)指丈夫。晋潘岳《寡婦賦》。唐顧况《棄婦詞》
- 【良人】 ①賢者；善良的人。《詩・大雅・桑柔》。《庄子・田子方》。《水滸伝・第45回》
- ②古時女子对丈夫的称呼。《孟子・离楼下》。趙岐注：“良人、夫也”。唐白居易《对酒示行簡》など。
- ③指美人。《詩・唐風・綢繆》
- ④平民；百姓。《後漢書》。《三国志》。唐白居易《道州民》など
- ⑤舊指身家清白的人。《水滸伝》。《金瓶梅詞話》。《儒林外史》
- ⑥即郷大夫。古代的郷官。《国語・齊語》など
- ⑦西漢妃嬪的称号。《漢書・外戚傳序》など

『漢語大詞典』には「所天」と「良人」が見出し語として取り上げられている。両方とも多義語であるため意味が一致していないことが分かる。意味が一致しているところは「所天」の(3)と「良人」の②である。つまり、「丈夫」の意味で「おっと」を表す場合のみ共通の意味である。語彙論の立場から見れば、示差的特徴⁴⁾を示す類義語であることが分かる。また、「所天」は漢籍で主に用いているのに対し、「良人」は漢籍や漢詩をはじめ、意味①や⑤のように中国俗文学でも用いられるなど、多様なジャンルで見られることが特徴であるといえよう。日本ではどうであったかを『日国大』を通して概観してみよう。

- しよてん【所天】 【名】 仰ぎ敬うべき人。妻からは夫、子からは親、人民からは君主などをいう。『本朝文粹』(1060頃)、『いろは字類抄』(1559)「所天ショテン夫也」、『布令字辨』(1868-72)、『八犬傳』(1814-1842)
- りょうじん【良人】 【名】 ①よい人。賢明で善良な人。『田氏家集』(892)、『正法眼 蔵』(1060)、『蒙求抄』(1529)

4) 秋元美晴(2002)『よくわかる語彙』アルク、p.113

②令制で、身分の一つ。賤(陸戸・官戸・家人・公奴婢・私奴婢)に対する概念。『続日本紀』(713)、『令義解』(718)

③おっと。亭主。『文華秀麗集』(818)、『新撰朗詠』(12C前)、『海道記』(1223)、『書言字考節用集』(1717)、『暴夜物語』(1875)

「所天・良人」はかなり早い時期に導入され日本文学にも用いられていたことが窺われる。「所天」は『漢語大詞典』の記述と一致していて、中国と同様の意味用法を持つことがわかる。「良人」の場合は『漢語大詞典』の①②⑥に当たる意味用法が見られ、中国よりも少ない。やはり、日本においても「所天・良人」の共通点が「おっと・夫・亭主」である点は『漢語大詞典』と同じである。『漢語大詞典』には「所天」の出典として中国俗文学の例が見られなかったが、小田切文洋⁵⁾の『唐話用例辞典』には「所天一父や夫など長として仰ぐ者」とあり、『金瓶梅詞話』『徒杠字彙』『八犬傳』の例を1例ずつ挙げている。量的にとっても少ないので差し当たり中国俗語だとは言いきれないが、漢語でありながら中国俗文学で少々用いられていたことを物語っている。このことは、「良人」と共に所謂白話語彙としての役割も担っていたことを意味していると思われる。外に、中国の俗文学と関係のある『明清小説辞典』(花山文芸出版社)には「所天」の例はなく、「良人」に「丈夫」の意味を与え『封神演義』の例を載せている。『元明清文学方言俗語辞典』(貴州人民出版社)には両語が見られない。

次に、日本の近世に刊行された「唐話辞書」(汲古書院)にはどのように現れているのかを見てみよう。

『語録訳義』(留守希斎、延享3年) 良人 夫トノコト

『学語篇』(顕常、明和9年) 良人
オツト

『雑字類編』(柴野栗山原撰、天明6年) 夫。夫婿。夫主。良人。所天。夫子。夫君。
フツト

『助語審象』(三宅橘園、文化14年)

良 ヤヤ、マコトニ、～婦人夫ヲ称シテ良人ト云末ヲ遂ルノ義ナリ

『徒杠字彙』(須原屋茂兵衛、安政7年) 良人 孟子オツト

所天 類集纂要オツト

『魁本大字類苑』(谷口松軒編著、明治19年)

夫子、良人 並ニヲツト。 良人
コチノヒト

5) 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院、p.427

近世や近代に刊行された唐話辞書は多くあるが、「所天・良人」の例がそれほど見当たらない。ということは、基本的に漢語であって中国俗語の性格があるとはいえ、薄いと思われる。また、その意味を見ると、多様な意味のうち専ら「夫・おつと」の意味を與えているので、近世の唐話辞書編纂者は一義的な意味だけを考えていたと思われる。近世の『書言字考節用集』には、『日国大』に提示されたように「良人」が見られる。明治期に入って実に多くの漢語辞書が刊行されるが、そこにはどのように現れていたのだろうか。

シヨテン
所天 ヲツトノコト (『布令字弁』荻田長三、明治1年11月、p.221)

しよてん
所天 オツト (『漢語字類』床原謙吉、明治2年、p.145)

シヨテン
所天 オヤ ヲツト (『増補漢語字類』莊原和、明治9年、p.144)

シヨテン
所天 ヲツト。テイシユ。(『漢語故諺熟語大辞林下』山田美妙、明治34年、p.288)

シヨテン
所天 フジンノヲツトヲ云フコトバ (『明治いろは字引大全』内藤彦一、明治15年、p.159)

シヨ フ
所夫 ヲツトノコト (『明治漢語字典』岡野英太郎、明治29年、p.467)

良人(りようじん) 妻、その夫を指して良人といふ。孟子、離婁章下、「其妻告其意、良人者所仰望而終身」。思ふにこは、夫婦互に称したるものの如し。詩経、「良人美室也」とあり。(『漢語字彙上』久保得二、明治37年、p.193)

りやうじん 良人(名) 妻より夫を称する語、おつと。(『作文新辞典』中村巷、明治39年、p.313)

りやうじん
良人 オツト (『漢語字類』床原謙吉、明治2年、p.145)

りやうじん
良人 おつと (『新撰字類』橋爪貫一、明治3年、p.53)

リキウジン
良人 ワガツマ 孟子注曰婦人称^レ夫曰^ニ良人^ト又詩注夫称^レ婦亦曰^ニ良人^ト (『画引早引自由熟字在』大館正材、明治11年、p.219)

リキウジン
良人 ツレアヒ (『大全漢語解』岩井久真、明治4年、p.310)

リキウジン
良人 ヨキヒト (『必携熟字集』下、村上快誠、明治12年、p.169)

りやうじん
良人 心のイイ人、昔人、詩経、黄鳥、「我良人」。すべて、ツマがヲツトを称スル語、以下省略。(『故事熟語字典』藤堂卓、明治33年、p.25)

まず「所天」について見ると、基本的に全てと言っていいほど「おっと」の訓を当てている。上に提示した例が訓の全てであるが、中国で用いられている「君主」の例はなく、「おや」の訓は只1例に過ぎない。「ていしゅ」の例も1例見られる。「所天」は近世の唐話辞書からも窺われていたように、日本では「おっと」一辺倒になっていたことが分かった。「所天」と同義の「所夫」の例は1例のみであるが、特別な説明はなく「おっと」として登録されている。

「良人」の場合は、少々多様な訓が見られる。「所天」と同様、基本的には同義の「おっと」の訓を当てている。外には、「ワガツマ・ツレアヒ・ヨキヒト・心のいい人」の例が少々見られる。ここで「ツマ」とは「おっと」の意味であるし、「ツレアヒ」も同伴者としての「おっと」に近い例である。「ヨキ人・心のいい人」は中国の「善良的人」と同様だろうが、『故事熟語字典』の解釈に見られるように「ツマがヲツトを称スル語」であるので、結局は「おっと」の意味として用いられていたと思われる。これについては、山田美妙の『漢語故諺熟語大辞林』(明治34年)にも「ツマがヲツトを称スル語」とあるように同じ意見が出されているので、中国の「善良的人」とは意味が異なるのではないかと思う。このことから考えてみると、明治期の漢語辞書の「良人」も全て「おっと」の意味として用いていたことが窺われる。

以下、「所天・良人」の出典について題名と出版年度のみを提示することにしよう。

「所天」(おっと)

『布令必用新撰字引』明治2年、『漢語便覧』明治3年、『増補新令字解』明治3年『大全漢語解』明治4年。『布令字弁』明治5年。『世界節用無尽蔵』明治6年。『世界節用無尽蔵』明治6年。『掌中漢語早引』明治6年。『大增補新撰字引』明治7年。『漢語字解』明治7年。『漢語註解』明治7年。『広益熟字典』明治7年。『新撰字解』明治7年。『大增補漢語大全』明治7年。『漢語新撰訳書字解』明治7年。『音画両引大全漢語字彙』明治8年。『漢語文章早引』明治8年。『開化字引大全』明治8年。『開化新撰字引』明治8年。『開化いろは字引』明治8年。『広益熟字典』明治8年。『漢語開化節用集』明治8年。『普通漢語字引大全』明治8年。『漢語新字引』明治9年。『新撰漢語字林大成』明治9年。『大全漢語便解』明治9年。『画引新撰漢語字引大全』明治9年。『増補漢語字解大全』明治9年。『初学必携大全漢語辞書』明治9年。『漢語両引便覧』明治10年。『新撰漢語小字典』明治10年。『文明いろは字引』明治10年。『改正増字書引漢語字典』明治10年。『雅俗作文自在引(上下)』明治10年。『画引早引自由熟字在』明治11年。『明治伊呂波節用大全』明治11年。『漢語両通新選いろは字引大全』明治14年。『新撰伊呂波節用』明治12年。『漢語伊呂波分大全数字引』明治12年。『懷中漢語字引大全』明治14年。『文明いろは字引』明治15年。『新撰普通漢語字引大全』明治17年。『漢語いろは字典』明治20年。『改正増補漢語新画引大全』明治20年。『漢語作文自在』明治20年。『萬民宝典漢語作文字引大全』明治26年。『漢語字典大全』明治26年。『漢語字解作文いろは字引大成』近

藤延之、明治28年。『明治漢語字典』明治29年。『新編漢語辞林下』明治37年。『作文新辞典』明治39年。『布令必携新聞字引』明治5年。

「良人」(おっと)

『漢語便覧』明治3年。『増補新令字解』明治3年。『新撰字解』明治5年。『世界節用無尽蔵』明治6年。『漢語二重字引』明治6年。『漢語類苑大成』明治6年。『漢語字解』池田観、明治7年。『広益熟字典』明治7年。『新撰字解』明治7年。『漢語新撰訳書字解』明治7年。『漢語文章早引』明治8年。『漢語集』明治8年。『開化字引大全』明治8年。『広益熟字典』明治8年。『普通漢語字引大全』明治8年。『漢語新字引』明治9年。『音訓新聞字引』明治9年。『新撰漢語字林大成』明治9年。『漢語和解一覽』明治9年。『音画両引開化節用集』明治9年。『大全漢語便解』明治9年。『布令律令字引』明治9年。『増補漢語字類』明治9年。『増補漢語字解大全』明治9年。『雅俗節用』明治9年。『初学必携大全漢語辞書』明治9年。『新撰漢語小字典』明治10年。『漢語日用弁』明治10年。『文明いろは字引』明治10年。『開化掌中早引』明治11年。『明治伊呂波節用大全』明治11年。『新撰伊呂波節用』明治12年。『新撰伊呂波節用』明治12年。『漢語伊呂波分大数字字引』明治12年。『いろは分漢語字引』明治13年。『漢語両通新選いろは字引大全』明治14年。『懷中漢語字引大全』明治14年。『明治いろは字引大全』明治15年。『文明いろは字引』明治15年。『漢語いろは字典』明治20年。『當今御布達字類』明治21年。『公益漢語伊呂波字引』明治22年。『漢語活益字典』明治25年。『漢語熟字解』明治26年。『新撰歴史字典』明治27年。『明治漢語字典』明治29年。『新定漢語字典』明治32年。『新編熟語字典』明治33年。『いろは引漢語新字典』明治39年。『外史訳語』明治7年。『歴史字引』明治9年。『日本外史国史略字類』明治9年。『掌中漢語早引』明治6年。『大全漢語便解』明治9年。『文章漢語熟字早引』明治9年。

リヤウジン
良人 ワガツマ

『掌中両引布令必携普通漢語解』大館正材、明治11年。

リョウジン
良人 ヨキヒト

『漢語熟字典』木戸照陽、明治期漢語辞書大系46、明治25年

リヤウジン
良人 ツレアヒ

『漢語註解』津江左太郎、明治7年。『大增補漢語大全』明治7年。『漢語両引便覧』明治10年。『音画両引大全漢語字彙』明治8年。『開化新撰字引』明治8年。『画引新撰漢語字引大全』明治9年。

リヤウジン
良人 心のイイ人。

『漢語故諺熟語大辞林上』山田美妙、明治34年。『新編漢語辞林上』明治37年。

以上のように「所天・良人」は実に多くの漢語辞書に見られることから、明治期の人には

かなり人気のあった語であることが分かった。ただし、中国で見られるような多様な意味としては用いられていないことが特徴と言えよう。特に「良人」の場合は、『言海』(明治37年)にも「りやうじん(名) 良人 妻ヨリ夫ヲ稱スル語」のように登録されているが、やはり「おっと」の意味として用いられている。では、実際に近世や近代の日本文学ではどのように用いられているのかを考察してみよう。

3. 近世・近代文学における「所天」

「所天」と「良人」には用例が多いので、ここでは個別的に考察したあとで総合的な結論を出そうと思う。まず、近世の「所天」から分析したい。「所天」は中国俗文学ではあまり用いられていなかったようで管見では見つからない。通俗和訳本の中国小説や日本人による白話小説、漢文戯作の「繁昌記」類にも見られない。「唐話辞書」には二カ所で見られたが、実際の中国俗語関係の文学ではそれほど好まれず、中国俗語的性格は強くないように思われる。近世の資料には、曲亭馬琴の読本に散見される。

おひ 姪を殺すは所天の為なり。(『八犬伝』文化11年一天保13年、岩波文庫本2冊、p.95)1例。

かたへぎき 側聞する曳手と単節は、わが所天ともしらざりしを、(岩波文庫本3冊、p.151)7例、4冊9例。

よくこしらへて村中へは、頓死と告て棺を出さん。悪人なれども所夫なるものの、なき身の
のち
後まで悪名を、～(岩波文庫本3冊、p.243)1例。

きまつよ 前世の悪報にて、所天を喪ひ子を先だてて、孤独の老女となりたり。(『近世説美少年録』文
政11年一天保3年、新編日本古典文学全集83、p.39)1例。

わが所天の禁獄せられしといふ、風声を聞給ひし敷。(『近世説美少年録』、文政11年一天保3年、
新編日本古典文学全集84、p.138)1例。

わが所夫に撃れたる、全八蝶繰九郎等に親族ありて、年来怨を報んとて、(『三七全傳南柯夢』
文化5年、日本名著全集読本集。p.766)3例。

思ふにおもひ絶がたき、わが所天のみか時も斉しく、(『三七全傳南柯夢』文化5年、日本名著全
集読本集。p.805)5例。

いま はじめ たびごころ わがつ ま つまがさ
 今を初の旅衣、俺所天ならぬ衿笠と、～(『開巻驚奇俠客伝』天保3年-天保6年、新古典文学大系87、p.194)4例。

近世における「所天」の例は、曲亭馬琴の作品に集中している。馬琴の読本、特に『八犬傳』に合わせて19例が見られ、他の作品ではあまり用いられていない。音読みの例はなく「所天」の語を借字した形で用いられているが、その訓について見ると『八犬傳』で「おっと」の例は1例のみである。他は全て「つま」の訓を当てているのが特徴である。しかし、用法から見れば19例のうち15例が「わが^{つま}所天」で、一種の慣用化した形で現れている。なお、「所天」に「つま」の訓を当てているからといって、訓の誤用ではない。『日国大』の「つま」のところを見ると、①「夫婦、恋人が互に相手を呼ぶ稱」とあり、「つま」の【夫】の欄には「一人前の男性。おとこ。「丈夫」「匹夫」妻の配偶者。おっと。「夫婦」「夫妻」労働をする男子」とあるように、古文では男性である「おっと」としても用いられていたのである。馬琴には「所夫」の例が少々見られるが、「つま」の訓を当てている。管見のところ4例見つけたが、『三七全傳南柯夢』には「わが^{つま}所夫」の例が2例用いられている。また『三七全傳南柯夢』には「わが^{つま}所天」も5例用いられている。こうしたことから、「所夫」は「架空のオット」と定義した近藤瑞子の意見は少々おかしい分け方ではないかと思う。馬琴の作品では、意味用法上「所天・所夫」の差はないように思われる。近世の他の作品では見られない。

近代の文学作品では、明治初期に流行っていた繁昌記類には用例が見つからない。普通の文学作品、特に小説には多様な例が見られる。

今若シ妾ヲシテ所天ヲ扱バシメバ、(『泰西活劇春窓綺話』坪内逍遙訳、明治17年1月、明治文化全集22、p.484)1例

却説ス奚ニ今タケガ嫁シテ所天トスルノ男子タルヤ年齒已ニ～(『世路日記』菊亭香水、明治17年、明文全2、p.368)1例

是等の諸母は適く所に所天を亡ひ、(『帰省』宮崎湖処子、明治23年6月、明文全36、p.55)1例。

所天を持った婦人はみな不幸に終つてゐると答へる。(『熱心の大切な事』岩野泡鳴訳、明治42年2月、明治翻訳文学全集10、p.31)1例

「所天」の例が近代の文学作品に見られるが、漢語としての用法は殆んどない。振り仮名がないのでどう讀んだのか未知であるが、文体上音読みとして讀まれた可能性はある。上

の2例は、まだ結婚していない所謂「架空のおっと」の状態であるので、「尊敬すべきおっと」などの意味用法の区分は無意味ではないかと思う。漢語としての使用はあまりなかったのだが、訓読みは多様な形で現れている。基本的に「おっと」の訓が多い。

故アリテ身自ラ羅馬^{ローマ}法王ニ謁^{エツ}シテ、所天^{ソツテン}ノ媒介^{バイカイ}ヲ請ハント欲シ〜(『群芳綺話』大久保勲三郎、明治15年6月、明治文化全集14、p.290)2例

まだ喜びの声絶へぬ間に、所天^{ソツテン}が空しく北^{ほく}郎^{ぼろう}の山下の土となりし後は、(『自由の凱歌』宮崎夢柳、明治15年8月、明文全5、p.30)1例

彼が妻は所天^{ソツテン}の不在^{ふざい}を幸^{あは}ひ夥^{おほ}多^くの仇^{あだ}し夫^{つま}を〜(『禽獣世界狐の裁判』井上勤、明治17年3月、明治初期翻訳文学選、p.15)1例

然れば阿^あ雪^{せつ}も所天^{ソツテン}の氣^きを能^{あた}く辨^わへし婦^{むすめ}人^{ひと}なれば、(『緑叢談』須藤南翠、明治17年12月、明文全5、p.360)9例

艶^{うつく}子は自己^{おのれ}が上^あならねど所天^{ソツテン}浮^う田^たが日頃^{ひぐら}の不^ふ身^み持^ぢ、(『女子参政蜃中楼』広津柳浪、明治22年11月、明文全19、p.172)1例。

「おっと」の訓を持つ「所天」はその例が多いが、例えば『女子参政蜃中楼』の例文は、実際の「おっと」を表す「所天」を用いていながらも、尊敬の念は入っていない。以下色々の所で見られるので、この「所天・所夫」の意味用法の区分は無意味であることが分かる。

「所天」は多義語であるので当然色々の意味で用いるべきであるが、近世や近代の文学作品ではかなり限られた意味で用いられていることが窺われる。「おっと」の訓は、以下のような作品(紙幅の関係上作品と作家のみを提示する)にも現れている。

『巷説二葉松』(宇田川文海)1例。『慨世士傳』(坪内逍遙)1例。『片手美人』(黒岩涙香)21例。『伽羅枕』(尾崎紅葉)10例。『犬蓼』(斎藤緑雨)8例。『寒菊』(斎藤緑雨)7例。『浮世魔風』(幸田露伴)1例。『むき玉子』(尾崎紅葉)2例。『袖時雨』(尾崎紅葉)8例。『いさなとり』(幸田露伴)2例。『花ぐもり』(尾崎紅葉)8例。『鉄仮面』(黒岩涙香)117例。『五重塔』(幸田露伴)1例。『弓矢神』(斎藤緑雨)8例。『十二ヶ月』(斎藤緑雨)1例。『別れ霜』(樋口一葉)1例。『鬼千疋』(北田薄氷訳)2例。『小説家趣向帳』(幸田露伴)1例。『秋の空』(北田薄氷訳)5例。『うしろ髪』(北田薄氷訳)10例。『くれの二八日』(内田魯庵)1例。『二階の客』(北田薄氷訳)13例。『うきまくら』(内田魯庵)2例。『破垣』(内田魯庵)1例。『錦木』(柳山春葉)3例。『狭足袋』(塚原洪柿園)1例。『はやり唄』(小杉天外)4例。『濱子』(草村北

星)4例。『運命論者』(国木田独歩)1例。『有髮尼』(長田秋濤)1例。『夫婦』(国木田独歩)3例。『孤独』(三島霜川)11例。『虚無』(三島霜川)7例。『青い顔』(三島霜川)4例。『ユダヤの女』(別所梅之助)1例。『宿縁』(吉田白甲)8例。『じやじや馬馴らし』(坪内逍遥)1例。『霧隠伊香保煙』(三遊亭円朝)2例。

外にも「所天」に種々の訓を挙げている。「おっと」以外の訓を全部提示すると次のようになる。

好所天よいごいでしゆを採択みつけむまでは此地このちへは帰かへるまじ。(『恋のぬけがら』尾崎紅葉、明治23年10月、紅葉全集2、p.298)3例。

然様ですとも、所天ていしゆの小使たまたなんぞにされて堪たまるわけのものぢやありません。(『不蔵庵物語』幸田露伴、明治38年4月、露伴全集4、p.75)4例。

所天あなは左様たち思きつて居まなさるのんですか。(『河内屋』広津柳浪、明治29年9月、明文全19、p.30)9例

『所天あな些時たちお待まちなすつて』と立た淀よどむ。(『夫婦波』菊池幽芳、明治37年1月。明文全93、p.242)47例。

又所天つれあひをも成なるべくは可笑をかしからぬやうさせたく、(『いさなとり』幸田露伴、明治24年11月、明文全25、p.56)3例。

ところが所天つれあひが死なくなつてからといふものは、(『運命論者』国木田独歩、明治36年3月、明文全66、p.117)2例。

大丈夫よ。今のうちなら、巧あなたく貴方たねの胤うちを所天しに売ま付けて了しまひますから。」と大胆に言放はなつて、『孤独』(三島霜川、明治40年12月。明文全72、p.248)2例

あなたは舍弟おとうとの細君おくさまですから所天うちのにや私わたくしに～(『此処やかしこ』坪内逍遥、明治20年3月、逍遥選集別冊4、p.335)2例。

所天うちのひとは平素つね質素ねと暮あそびながら娘むすめの事ことと云いへば～(『いさなとり』幸田露伴、明治24年11月、明文全25、p.58)2例。

オホン喃我なうわが所天つ角ま太まぬしオホン……(『紅子戯語』尾崎紅葉、明治21年、明文全18、p.335)1例

噂うわさするほどの所天わが、無分別むべつべんに贅ぜい沢たくさるるでは無なかるべきが～(『いさなとり』幸田露伴、明治24年11月、明文全25、p.58)1例。

こはわが^{つま}所天としてことが、(『ふらんちえすか物語』石川戯庵訳、明治42年9月、明治翻訳文学全集50、p.305)2例。

^{やど}所天はかねがね^{おにあにさん}御兄様とは^{おちかづき}御相識の由にて、(『寝白粉』小栗風葉、明治29年9月。明文全65、p.152)2例。

小供は沢山ですし^{やど}所天の看護にも手の懸るので、(『わらはの思出』福田英子、明治38年12月。明文全84、p.34)1例。

女は^{をとこ}所天次第ぢやあ無いか、立派な^{をとこ}所天を御持ちで、そして^{わたし}妾にやあ～(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p.342)4例。

^{ぬし}所天有る^{もの}婦人と^{せき}席を^{とも}俱にする^いと云ふのは～(『霧隠伊香保煙』三遊亭円朝、明治22年7月、円朝全集8、p.303)3例。

「所天」に與えた訓は、「ていしゅ・あなた・つれあひ・うち・うちの・うちのひと・つま・やど・をとこ・ぬし」のように多様である。作家が第三者として表現する場合もあるが、会話文で女性が自分の「おっと」に対して文脈に合わせて用いた種々の訓である。最後の例に「をとこ」の訓があるが、一般的な「男」であるだけでなく将来の結婚の相手としての「男」でもあるので、結局は「おっと」の意味として現れている。日本で呼称としての「所天」が特に明治期に大変流行っていたことを物語っている。以下、その出典を提示しておこう。

^{ていしゅ}
「所天」

『錦木』(柳山春葉)1例。『天うつ浪』(幸田露伴)2例。『孤独』(三島霜川)1例。『虚無』(三島霜川)1例。『不蔵庵物語』(幸田露伴)4例。

^{つれあひ}
「所天」

『自縄自縛』(幸田露伴)3例。『初霜』(幸田露伴)1例。『ささ舟』(幸田露伴)5例。『椀久物語』(幸田露伴)1例。『女子参政屋中楼』(広津柳浪)1例。『役の行者』(坪内逍遙)1例。

^{あなた}
「所天」

『残菊』(広津柳浪)1例。『新任知事』(永井荷風)1例。『琵琶歌』(大倉桃郎)7例。『空薫』(大塚楠緒子)22例。『そら薫続篇』(大塚楠緒子)14例。『鬼烟』(永井荷風)8例。『新任知事』(永井荷風)1例。『夫婦』(国木田独歩)2例。『竹の木戸』(国木田独歩)1例。『人形のすまゐ』(藤沢古雪訳)9例。『ねんねえ旅籠』(森鷗外)9例。「学者の細君」(幸田露伴)1例。

「所天」の訓にもかなり偏りがあることが分かるだろう。このことから、「おっと」を基本の訓として、「ていしゅ・つれあひ・あなた」がそれなりの役割を担っていることが窺われる。「うち・うちの・うちのひと・つま・やど」は上に提示したものが全てである。

一方、「所夫」の場合は量的には少いけれども、意味用法としては「所天」と同様に用いられている。

頼む所夫の上に恙もあらば～(『小夜千鳥浪の音信』三品蘭溪訳、明治16年6月、リプリント日本近代文学12、p.127)1例。

如何に我身の不束なればとて、所夫は一人といふほどの心得はあり。(『不言不語』尾崎紅葉、明治28年1月、紅葉全集5、p.80)1例。

此の時頃として踏み止まり、所夫の半右衛門を励ましたのは、(『明治富豪史』横山源之助、明治43年6月。明文全96、p.38)1例。

先ア所夫は、」とお岸は呆れた顔をして良人の顔を～(『社会百面相』下、内田魯庵、明治35年6月。岩波文庫、p.101)4例

所夫は一人で始中終御出懸けですし、(『女詩人』鶉浜生訳、明治39年4月、明治翻訳文学全集5、p.220)1例。

骨身は惜まないとおツしやるから所夫もあのやうな人ですから寔にお気の毒な事だと～(『此处やかしこ』坪内逍遙、明治20年3月、逍遙選集別冊4、p.332)1例。

互に熱度が高まり過ぎて容易に手をばつけ難けれども、一人は伯母なる人の所夫なり、(『女子参政屋中楼』広津柳浪、明治22年、明治文化全集21、p.282)2例。

このリミニに、心にもなき所夫に冊く心苦しきには、～(『ふらんちえすか物語』石川戯庵訳、明治42年9月、明治翻訳文学全集50、p.304)2例。

「所夫」も「所天」と意味用法の上で変りはない。「所夫」を「所天」と置き替えても別段違和感のない表現になる。「所夫」には音読みはなく、「おっと・あなた・うちの・つれあひ・つま」の訓が見られる。このうち、「うちの・つれあひ・つま」は上の例文が全例であるので、「所天」と同じく珍しい訓といえよう。但し、「所天・所夫」の分布を見れば、「所夫」は西洋文学の翻訳に少々集中している傾向がある。出典を提示すると以下の通りである。

を^{つと}
「所夫」

『安中草三伝後開椿名の梅が香』三遊亭円朝)1例。『此処やかしこ』(坪内逍遙)1例。『妹と背かがみ』(坪内逍遙)1例。『社会百面相』(内田魯庵)1例。『秋の空』(北田薄氷訳)1例。『二階の客』(北田薄氷訳)6例。『鬼千疋』(北田薄氷訳)2例。『うしろ髪』(北田薄氷訳)5例。『サロメ』(森鷗外訳)1例。『栄枯譚』(韋庵居士訳)1例。『有髪尼』(長田秋壽訳)1例。『宿縁』(吉田白甲訳)2例。『夜と朝』(長谷川天溪訳)1例。『モンナ・ヴンナ』(佐藤紅緑訳)2例。

あ^{なた}
「所夫」

『怨の刃』(福智山人訳)1例。『モンナ・ヴンナ』(佐藤紅緑訳)2例。

以上、「所天」と「所夫」について考察した。「所天」には文体上音読みと思われるところもあるが、両語ともに主として訓読みで用いられている。その訓には「おっと」を始め、それに類似する語が振られている。両語の意味用法上の相違は別段見られない。『漢語大詞典』や『日国大』では多義語として扱われていたが、近世や近代の文学作品では専ら「おっと」の意味が與えられていて単義語のみである。

「所天」は日本でかなり早い時期から用いられていた語であるが、近世後期の馬琴の文学作品から本格的に見られる。近世に刊行された「唐話辞書」にも少々見られる。中国俗語的要素がないわけではないが、関連する作品には見られない。近代になると実に種々の作品に見られることから、「所天」は「おっと」を表す語として流行した語であるといえよう。それは、明治期の漢語辞書に「所天」の例が沢山掲載されていることから分かるだろう。流行した理由について具体的に論証することは難しいが、馬琴の読本も一つの要因ではないかと思う。近藤が「良人」のところで述べてはいるが、「所天」の説明では言及していない。近代には、中国俗文学のみならず『八犬傳』のような読本も人気があったので、その用字法から影響を受けた可能性が高い。馬琴の読本に現れている「所天」の例はすべて「おっと」の意味として用いられているし、近代でも同様の結果が得られる。また、「所天」の同義の「所夫」も読本に見られるが、『漢語大詞典』や『日国大』には見出し語として登録されていない。「所夫」には漢語としての用法はなく、専ら「おっと」などを表す借字として用いられている。しかし、中国のインターネット(百度)検索によれば「所夫」の用例があるので、和製漢語だとは断定しにくい。日本の文学では馬琴の作品に見え始めることから、やはり馬琴の言葉は近代にも影響を與えたと思われる。「所夫」は明治期の漢語辞書に1例見られたが、一般的に通じた言葉であるとは言にくく、文学作品にのみ用いられていた。馬琴における「所天・所夫」の近代への影響は、漢語そのものというよりは訓読みの借字の形である。

4. 近世・近代文学における「良人」

「所天・所夫」の類義語として良人がある。「良人」も中国ではかなり古い時から用いられていたもので所謂漢語であるが、その意味は多様であった。一方、「所天」と違って「善良の人」や「舊指身家清白の人」の意味は中国俗文学で用いられる場合もあり、唐話辞書にも少々取り上げられていることが特異である。しかし、実際は中国俗文学では頻度の高い語ではないらしくそれほど用いられていない。日本に伝えられた『小説三言』にもないし、日本人に読みやすくした通俗和訳本には1例見られた。日本では「所天」と同様、馬琴の読本が重要な役割をしていたことが分かる。まず、近世の読本における例を見ることにする。『八犬傳』の場合は、岩波文庫本3冊まで提示することにする。

畜生を良人とし、妻とせらるる例を聞ず(『八犬伝』文化11年一天保13年、岩波文庫本1冊、p.172)1例、良人7例。

然らばいよいよわが良人を、怨て害心日来にますべし。侄を不便にせざるにはあらねど、所天には換がたし。(『八犬伝』文化11年一天保13年、岩波文庫本2冊、p.95)11例。

女子のうへには五障とやら、三従とやらいふことの、ありとし聞けば良人には、理なきことも悖らはず、(『八犬伝』文化11年一天保13年、岩波文庫本2冊、p.278)1例。

一ト日も添ぬ良人の面影、尚視覚る違だに、なき人とこそなりけん、(『八犬伝』文化11年一天保13年、岩波文庫本3冊、p.116)30例。

良夫はなほも不言の行に、心を凝らす莫妄想、(『八犬伝』文化11年一天保13年、岩波文庫本3冊、p.402)1例。

「所天」もそうだったが「良人」も文庫本10冊を基準にして5冊までに多用されていて、その後は段々減っていく。『八犬傳』における使用例を冊ごとに見ると次の通りになる。

	をつと	つま	をとこ	無訓
1冊	1	7		
2冊	8	11	1	1
3冊	26			1
4冊	36			
5冊	14			
6冊	8			
7冊	1	2		
8冊	5			
9冊	2			
10冊	1			

7冊が例外的ではあるが、1、2冊で「をつと・つま」の両訓を當てていたのが、その後は「をつと」の訓に片寄っている。その代り、3、4冊では「所天」に「つま」を當てることにより訓の使い分けをしようとしたのだが、「所天」は用いなくなる。唯一の「をとこ」の訓は「おっと」としてではなく、「女」に対する「男」の訓も見られた。無訓の場合は、前の例に「をつと」の読みがあったので「をつと」の訓である可能性がある。「良夫」は4例で非常に少なく、「をつと」の訓で讀まれている。このように、『八犬傳』の場合は「良人」が「おっと」「つま」を表す漢字表記として基本的に用いられていたことが分かった。外に「丈夫・夫子」の例が見られるがそう多くない。馬琴の他の作品にも見られる。

すくせわる ^{をつと} 良人に後れ、^{ひよりご} 独子さへに先だてて、(『近世説美少年録』文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集83、p.77)25例、84-28例、85-23例。

はちだいらうわうかんおふ ^{をつと} 良人をはじめ、^{せんちゆう} 船中の黨はさらなり。(『椿説弓張月』文化4年一文化11年、岩波文庫中巻、p.62)8例、下巻20例

いさ ^{をつと} と勇む良人に^{はげま} 励され、^{なか} 泣じと^{そで} 袖を^{かみし} 嚙締むる。(『頼豪阿闍梨恠鼠伝』文化5年、古典叢書滝沢馬琴5、p.150)5例

お花は^{をつと} 良人にうち^{むか} 対ひ、墓なきものは人の命、(『三七全傳南柯夢』文化5年、日本名著全集読本集、p.825)16例

をり ^ふ 折に触れ良人に^{をつと} 薦めて、^し 子孫の^{そん} 為に^{ため} 侍るなる、~(『開卷驚奇侠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.18)40例

善悪よしあしについてこの年来としごう。良人つ まの仰をせに悖もとらざりし。(『松染情史秋七草』文化6年、古典叢書滝沢馬琴5、p.199)3例

この「良人」の場合も「おっと」の訓を付けるのが一般的であって、「つま」の訓はあまりない。しかし、「所天」と異なって「良人」は馬琴の専有物ではなく、他の作家の作品にも見られる。

天下はれ晴ての立派な夫婦、良人ていし もつを持てるお身の上で、(『閑情末摘花』松亭金水編次、天保10—12年、日本名著全集人情本、p.749)9例。

私の良人つれあひは少しは学問もいたしたもの、平常つねづねしにいたしたのを、(『閑情末摘花』松亭金水編次、天保10—12年、日本名著全集人情本、p.724)1例、良人おつと2例。

良家りやうかの婦ふとなりてはならぬ事にや。良人りやうじん(をつと)に従したがふ時は、入いつては舅姑おこいしやうとめに事つかへ、(『英草子』都賀庭鐘、寛延2年、日本古典文学全集。p.184)1例。

あはれ良人よきの女子の顔よきを娶めとりてあはせなば、渠かれが身もおのづから修をさまりなん」と(『雨月物語』上田秋成、安永5年、日本古典文学全集。p.397)1例。

今ワレ良人ヒナニ従ヨメテントヲモフニ怎イカ地シテカヨカラシム(『通俗繡像新裁綺史』月池睡雲庵、寛政11年、近世白話小説翻訳集、p.294)1例

上の例が管見で見つけた例であるが、松亭金水、都賀庭鐘、上田秋成の作品にも見られる。そこには「良人・良人・良人・良人・良人」のように、馬琴とは異なる訓を施していることが特徴である。『閑情末摘花』は人情本であるので、読本にのみ用いられていたわけではないことも分かった。都賀庭鐘の『英草子』の場合は「良人」に音読みの「りょうじん」もあって、漢語として用いられていたことも特異といえよう。『雨月物語』の例は「良家」のことをさすので、厳密にいえば『漢語大詞典』の①にあたるものといえよう。また、中国俗文学を翻訳した『通俗繡像新裁綺史』に「ひな」の訓を当てたのも特異な例である。このように、近世の文学では「所天」より「良人」の方が広がりを見せていたが、その意味用法は非常に少い。

次に、近代の文学には、どのように用いられていたのかを見てみよう。

妾、実は良人の在る有り。(『本朝虞初新誌』菊池三溪、明治16年10月、新古典文学大系3、p.88)6例。

「今日の角觥(ケフノスモフハ)は、即ち良人の命脈の關係する所なり。～」(『西京伝新記』菊池三溪、明治7年12月、新古典文学大系1、p.303)6例。

君乃良人歟阿爹歟(『艶華文叢』榎木寛測、明治14年8月、国会図書館蔵本、p.29ノウ)2例

『本朝虞初新誌』は漢文小説、『西京伝新記』『艶華文叢』は漢文戯作で、菊池三溪や榎木寛測の作品に見られる。漢文であるので当然音読みであろうが、上の例文は読み下しや訓読の文章である。漢文戯作類には「良人」があまり用いられていなかった。漢文類にはあまり用いられない語であったが、音読みの「良人」が普通の文学作品にも見られる。

曰く良人激怒を抑へて、(おまへさんおこるをやめておききなさい)且らく妾が言を聴け、(『五九節操史』松岡亀雄、明治14年2月、国会図書館蔵本、p.1ノ30)5例。

我が良人は諸君の代表たるに耻ず。(『緑叢談』須藤南翠、明治17年12月、明文全5、p.396)29例。

國野氏は其の前年許嫁して跡跡を失ひし良人なることが知れ、(『花間鶯』末広鉄腸、明治20年4月、明文全6、p.167)1例。

巾幗歌を詠じて遠征の良人に贈る、「病床に於て」斎藤緑雨、明治28年1月、斎藤緑雨全集2、p.138)1例。

『新粧之佳人』(須藤南翠)1例。「理想の佳人」(岩本善治)2例。「文人記者の伉儷」(岩本善治)5例。「婚姻論」(岩本善治)3例。『青山白雲』(徳富蘆花)2例。『暴夜物語』(永峰秀樹)1例。『春情浮世の夢』(河島敬蔵)1例。『思出の記』(徳富蘆花)3例。『良人の自由』(木下尚江)1例。『罪と罰』(内田魯庵)2例。『泰西活劇春窓綺話』(坪内逍遙訳)2例。『世路日記』(菊亭香水)13例。『仏國演戯薄命才子』(川島忠之助訳)2例。『花心蝶思録』(高須治助訳述)1例。『虚無黨退治奇談』(川島忠之助)6例。『鴛鴦春話』(和田竹秋)2例。『群芳綺話』(大久保勘三郎)19例。

「所天」と違って、漢語としての「良人」が比較的に広まっていたことを物語っている。『泰西活劇春窓綺話』以下の資料は無訓であるが、漢文直訳体の文章であるので漢語として取り扱った。明治期の漢語辞書にも現れているように「りょうじん」は全て「おっと」の意味であ

ることが分かった。このような現象は、訓読みの例でも見られる。ここでも「良人」とまつわる訓が多いので2例ずつ取り上げることにし、その他の例については、作品と作家、用例数のみを提示することにする。「良人」にどのような訓がどの作家によってどれほど使用されているのかを把握するためにできる限り出典を明記したい。

「をつと」

ひごらうぎ をつと なを いへ かきんこのま はは かんどう
 平日忠義の良人の名折れ家の瑕瑾此間に母が勘当するチツとも～(『巷説二葉松』宇田川文海、
 明治17年1月、明文全2、p.236)4例。

将軍には知らせ玉はんが。妾の良人は。此回の生死も知れぬ～(『泣花怨柳北欧血戦餘塵』森
 詠、明治19年8月、『明治文化資料叢書10』、p.221)21例。

『十二ヶ月』(斎藤緑雨)3例。『妹背貝』(岩谷小波)2例。『都会』(生田葵山)33例。『英国孝子之傳』(三遊亭円朝)1例。『鏡花縁』(尾崎紅葉)1例。『病床に於て』(斎藤緑雨)1例。『新説八十日間世界一週』(川島忠之助)1例。『欧州奇事花柳春話二編』(丹羽純一郎訳)36例。『東京新繁昌記』(服部撫松)7例。『西の洋血潮の暴風』(櫻田百衛)1例。『鬼啾啾』(宮崎夢柳)2例。『民権演義情海波瀾』(戸田欽堂)6例。『罪と罰』(内田魯庵)18例。『たま櫛』(樋口一葉)1例。『別れ霜』(樋口一葉)1例。『五月雨』(樋口一葉)2例。『軒もる月』(樋口一葉)9例。『ゆく雲』(樋口一葉)1例。『うつせみ』(樋口一葉)1例。『にごりえ』(樋口一葉)3例。『十三夜』(樋口一葉)7例。『この子』(樋口一葉)4例。『われから』(樋口一葉)10例。『人文字』(石橋忍月)1例。『かた鶉』(内田魯庵)2例。『くれの二八日』(内田魯庵)2例。『臺右衛門』(宮崎三昧)3例。『黴』(徳田秋声)2例。『勲章』(徳田秋声)2例。『我觀録』(登張竹風)4例。『小説黒潮』(徳富蘆花)46例。『小野小町論』(黒岩涙香)1例。『はやり唄』(小杉天外)20例。『ありのすさび』(後藤宙外)1例。『二十四五』(田秋声)23例。『足跡』(徳田秋声)12例。『黒い目と茶色の目』(徳富蘆花)3例。『富士』(徳富蘆花)29例。『妹背貝』(木村曙)2例。『都会』(生田葵山)33例。『僥倖』(幸田露伴)1例。『醒めたる女』(坪内逍遙)1例。『痛み』(徳田秋声)12例。『新世帯』(徳田秋声)1例。『残菊』(広津柳浪)19例。『名物松原饅頭』(広津柳浪)1例。『琵琶伝』(泉鏡花)2例。『化銀杏』(泉鏡花)20例。『奴の小万』(村上浪六)10例。『みみずのたはこと』(徳富蘆花)1例。『良人の自由』(木下尚江)32例。『破太鼓』(村上浪六)1例。『海底軍艦』(押川春浪)2例。『雨の日ぐらし』(山田美妙)4例。『親の恩』(宮崎三昧)7例。『剣と恋』(レンガード)1例。『わらはの思出』(福田英子)9例。『濱子』(草村北星)17例。『乳姉妹』(菊池幽芳)12例。『夫婦波』(菊池幽芳)69例。『女子参政屋中楼』(広津柳浪)5例。『女房殺し』(江見水蔭)7例。『旅役者』(江見水蔭)2例。『平清盛』(山田美妙)3例。『したゆく水』(清水紫琴)1例。『婦女の鑑』(木村曙)3例。『そら薫続篇』(大塚楠緒子)10例。『社会百面相』(内田魯庵)35例。『泉香』(泉鏡花)1例。『二た面』(泉鏡花)1例。『ひかぢの花』(永井荷風)3例。『浮沈』(永井荷風)11例。『花瓶』(永井荷風)3例。『おかめ笹』(永井荷風)5例。『笈摺草紙』

(泉鏡花)2例。『わが紫』(泉鏡花)2例。『大洪水』(松居松葉訳)1例。『戦塵』(内田魯庵訳)2例。『首輪』(菊地庵主人訳)20例。『有髮尼』(長田秋濤訳)1例。『生弁天』(長田秋濤訳)1例。『豚林』(長田秋濤訳)1例。『狂画聖』(内田魯庵訳)2例。『文明花園春告鳥』(服部誠一)4例。『春葉集』(柳川春葉)6例。『西洋穴探』(加藤政之助訳)4例。『憂世の涕涙』(宮崎夢柳訳)1例。『三人やもめ』(北田薄氷訳)1例。『秘妾傳』(泉鏡花)2例。『ささ蟹』(泉鏡花)1例。『新粧之佳人』(須藤南翠)25例。『海異記』(泉鏡花)1例。『夏瘦』(尾崎紅葉)21例。『自然と人生』(徳富蘆花)1例。『青蘆集』(徳富蘆花)5例。『思出の記』(徳富蘆花)15例。『名婦鑑』(徳富蘆花)31例。『うきまくら』(内田魯庵)8例。『あたらよ』(内田魯庵)5例。『何楼彼桜銭世中』(宇田川文海訳)7例。『海外情譜』(無署名)4例。『青理想』(内田魯庵)2例。『社会詩人』(内田魯庵)1例。『婚後』(内田魯庵)13例。『むかし気質』(内田魯庵)8例。『黒白染分纏』(高島藍泉)2例。『短剣を持ちたる女』(森鷗外)1例。『アンドレアス・タマイエルが遺書』(森鷗外)1例。『不朽な愛』(高須梅溪訳)1例。『可憐鷹』(宮崎湖處子訳)1例。『女の鑑』(浅野憑虚訳)3例。『八十日間世界一周』(川島忠之助)1例。『里の女』(瀬沼夏葉訳)2例。『艶福男』(瀬沼夏葉訳)3例。『胡蝶』(草野柴二訳)1例。『泥鴨』(草野柴二訳)4例。『暗闇』(伊東六郎訳)3例。『ころころ石』(西村酔夢訳)2例。『したたかもの』(岸上質軒訳)2例。『藻屑』(大塚楠緒子訳)2例。『三日月』(村上六郎)7例。『単純』(生田長江訳)3例。『若武者』(福智山人訳)3例。『春風裡』(内田魯庵訳)38例。『オセロ』(江見水蔭訳)11例。『理想佳人傳』(無署名訳)2例。『キンダーミーヤ夫人の扇』(岩野泡鳴訳)8例。『庭園の大戦争』(土肥春曙訳)2例。『クラリッサ』(中島孤島訳)2例。『女詩人』(鵜浜生訳)2例。『栄枯譚』(韋庵居士訳)2例。『母ひとり子ひとり』(秋花女子訳)1例。『仏乱余聞』(佐々木邦訳)3例。『佛蘭西太平記、鮮血の華』(宮崎夢柳訳)6例。『売家』(田山花袋訳)4例。『大洪水』(十八公子訳)1例。『通俗花柳春話』初編(織田純一郎)4例。『女子参政屋中楼』(広津柳浪)6例。『風流線』(泉鏡花)1例。『きく濱松』(幸田露伴)13例。『不如帰』(徳富蘆花)40例。

「良人」に「おっと」の訓を當てるのは実に一般的な現象であることがわかる。元来「良人」には多様な意味があったのであるが、日本では「おっと」に片寄っていることがわかるだろう。音読も「おっと」の意味であった。「おっと」の訓以外にも「おっと」と似ている多様な訓があるが、どのようなものがあるのかを見よう。訓の多様性を見るため異なる訓は全て提示するが、ここでは紙面の関係上、多くの例を載せることはせず1例ずつ挙げて、他の例は作品と作家と用例数を提示するに止めたい。

「ていしゅ・ていし・てえし・こてへし」

貴女も^{ていしゅ}良人を待たずに待て居てください。(『英国孝子之傳』三遊亭円朝、明治18年7月、明文全10、p.201)1例。

『罪と罰』(内田魯庵)1例。『天うつ浪』(幸田露伴)1例。『くれの二十八日』(内田魯庵)6例。『湯島詣』

(泉鏡花)1例。『片時雨』(内田魯庵)3例。『黒百合』(泉鏡花)1例。『悪魔』(自笑軒不酔訳)1例。『くれの二八日』(内田魯庵)5例。『きく濱松』(幸田露伴)1例。『西洋人情話英国孝子ジョージスミス伝』(三遊亭円朝)1例。『敵討札所の靈験』(三遊亭円朝)1例。良人『安中草三伝後開榛名の梅が香』(三遊亭円朝)4例。『敵討札所の靈験』(三遊亭円朝)5例。『松と藤芸妓の替紋』(三遊亭円朝)1例。良人『西洋人情話英国孝子ジョージスミス伝』(三遊亭円朝)1例。良人『霧隠伊香保煙』(三遊亭円朝)1例。

「しゅじん」

お園が御良人筋ゆゑ大事だいじにかけて～(『昼夜帯加茂川染』高島蘭泉訳、明治16年7月、リプリント日本近代文学55、p.127)1例。

「ぬし」

段々容子を聞けば和女は良人れいじん有る身の上と云ふ事だから何うか是切りに成て貰ひ度、(『安中草三伝後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18年、円朝全集2)、pp.371-372)1例。『後開榛名の梅が香』(明治18-22年)1例。

「あなた・あんた」

でも良人! 高野さんは感かん心しんな方かたですよ。(『すみれ日記』岩谷小波、明治28年8月、明文全20、p.218)1例。
『塩原多助一代記』(三遊亭円朝)2例。『買収政略大策士』(福地桜痴)2例。『花間鶯』(末広鉄腸)1例。『安中草三伝後開榛名の梅が香』(三遊亭円朝)5例。『女詩人』(鶴浜生訳)8例。『女子参政蠶中楼』(広津柳浪)5例。『残菊』(広津柳浪)2例。『五月鯉』(岩谷小波)3例。『良人の自由』(木下尚江)1例。『小説黒潮』(徳富蘆花)9例。『慾と慾』(内田魯庵)16例。『イワンの馬鹿』(内田魯庵)3例。『女子参政蠶中楼』(広津柳浪)9例。『怨の刃』(福智山人訳)2例。『まやかし物』(香堂訳)3例。『思出の記』(徳富蘆花)4例。『不如帰』(徳富蘆花)13例。『後開榛名の梅が香』(三遊亭円朝)9例。『敵討札所の靈験』(三遊亭円朝)2例。『緑林門松竹』(三遊亭円朝)1例。『松と藤芸妓の替紋』(三遊亭円朝)1例。良人『不如帰』(徳富蘆花)34例。

「つれあひ・つれあい・つれやひ・つれやい」

はじめはあの向うへ、良人れいじんが行つて居ります。(『銀短冊』泉鏡花、明治38年4月、鏡花全集9、p.212)2例。
『塩原多助一代記』(三遊亭円朝)1例。『恋のぬけがら』(尾崎紅葉)2例。『仇浪』(尾崎紅葉)1例。『ヘダ・ガブラア』(千葉掬香訳)1例。『社会百面相』(内田魯庵)1例。『オセロ』(戸沢姑射訳)1例。『安中草三伝 後開榛名の梅が香』(三遊亭円朝)1例。良人『松と藤芸妓の替紋』(三遊亭円朝)1例。

つれやひ
良人『安中草三伝後開榛名の梅が香』(三遊亭円朝)1例。『鏡ヶ池操松影』(三遊亭円朝)1例。『緑林
門松竹』(三遊亭円朝)1例。つれやい
良人『霧隠伊香保煙』(三遊亭円朝)1例。

「やど」

かやうやど
斯様に良人とあなた様と、暮をお囲みでござりまするを、(『水天宮利生深川』河竹黙阿弥、明
治18年2月、明文全9、p.178)1例

『稲むしろ』(斎藤緑雨)7例。『塩原多助一代記』(三遊亭円朝)2例。『泊客』(柳川春葉)1例。『菅笠日
記』(黒田湖山)1例。『油地獄』(斎藤緑雨)2例。『風流線』(泉鏡花)1例。『みみずのたはこと』(徳富蘆
花)6例。『小説黒潮』(徳富蘆花)2例。『良人の自由』(木下尚江)1例。『女客』(泉鏡花)1例。『袖屏風』
(泉鏡花)4例。『女仙日記』(泉鏡花)1例。『花ちる夜』(永井荷風)2例。『ころころ石』(西村醉夢訳)1
例。『社会の敵』(森豊峯訳)15例。『へダ・ガブラア』(千葉掬香訳)6例。『さんなきぐるま』(幸田露
伴)1例。『あがりがま』(幸田露伴)1例。『濡衣』(北田薄氷訳)1例。『X螭螂鯨鉄道』(泉鏡花)1例。
『緑林門松竹』(三遊亭円朝)1例。

「うち」

いづれうち
いづれ良人でお話し申すだらうが些いと考へてる事があるんだから……(『浮雲』二葉亭四迷、
明治20年6月、明文全17、p.14)2例

『罪と罰』(内田魯庵)1例。『泊客』(柳川春葉)3例。『陽気な女房』(松居松葉訳)2例。『売花翁』(斎藤
緑雨)1例。『五重塔』(幸田露伴)5例。『月夜鴉』(遅塚麗水)2例。『彩色人情本』(泉鏡花)4例。『蛆虫
のやうに』(中村星湖)1例。『闇の夜』(永井荷風)1例。『暗まぎれ』(泉鏡花)8例。『破島臺』(内田魯
庵)10例。『電影』(内田魯庵)7例。『栗太口露笛竹』(三遊亭円朝)1例。うち
良人宅『不如帰』(徳富蘆花)1
例。

「うちの」

うちの
良人が、そんなものが好きだから、(『白鷺』泉鏡花、明治42年10月、鏡花全集12、p.575)1例。

『霜くづれ』(内田魯庵)8例。『婦系図前』(泉鏡花)1例。『陶庵候に就て』(国木田独歩)1例。

「うちのひと・うちかた」

うちのひと
良人は何をして居て帰宅られぬことぞ、(『いさなとり』幸田露伴、明治24年11月、明文全25、
p.73)16例。

『五重塔』(幸田露伴)1例。『月夜鴉』(遅塚麗水)1例。『陽気な女房』(松居松葉訳)1例。『由縁の女』
(泉鏡花)2例。『オセロ』(戸沢姑射訳)1例。『テス』(高瀬青袍訳)1例。『わが死』(木内愛溪生訳)3
例。『叱ツ』(瀬沼夏葉訳)1例。『をさな心』(幸田露伴)2例。『霧隠伊香保煙』(三遊亭円朝)1例。『松
と藤芸妓の替紋』(三遊亭円朝)1例。うちかた
良人『鏡ヶ池操松影』(三遊亭円朝)1例。

「ひと」

あアあ家の良人にも困るねえ頃日から自棄酒が続いて、(『月夜鴉』遅塚麗水、明治29年12月、明文全26、p.345)1例。『霧隠伊香保煙』(三遊亭円朝)1例。『不如帰』(徳富蘆花)1例。

「あのひと」

良人は釜の中の水性、初終喧嘩の絶えぬは無理はない、(『月夜鴉』遅塚麗水、明治29年12月、明文全26、p.347)1例。

「おまいさん・おまへ」

私やア家に居ても良人が今夜ア何所に往て、(『買収政略大策士』福地桜痴、明治30年6月、明文全11、p.115)1例。良人『緑林門松竹』(三遊亭円朝)1例。

「いろ」

想ふに卿必ず當に良人の在るなるべし。(『東京新繁昌記』服部撫松、明治7年4月、明文全4、p.207)1例

「よきひと・いひひと」

誠に信切にて「良人」なり(『妹と背かかみ』坪内逍遙、明治18年11月、明文全16、p.214)1例
良人(『文明花園春告鳥』服部誠一、明治21年1月、リプリント日本近代文学96、p.425)2例。

「エツチ」

本統に飛子さんの良人自慢も聞飽きたよ。(『破島臺』内田魯庵、明治31年7月、内田魯庵全集9、p.106)2例。

「ハズ」

爾う爾う、結婚の三枚襲で良人と一緒にカビネで写真を撮つて学校の先生からお友達へ配らうや。(『破島臺』内田魯庵、明治31年7月、内田魯庵全集9、p.105)1例。

「ハズバンド」

所謂『恋愛』とか、『良人』とかを説く所であつて、(『紺暖簾』山岸荷葉、明治34年6月、明文全22、p.268)1例。

「だんなさま」

「良人サア不躰著にお斬遊ばせ。」(『安中草三伝後開椿名の梅が香』三遊亭円朝、明治18年6月、p.118)3例。良人様(『夫婦波』(菊池幽芳)3例。

「おやぢ」

母「これは私が良人の遺物で御座いまして。七ヶ年跡出た切り行衛が知れませんが。(『西洋人情話英国孝子ジョージスミス之伝』三遊亭圓朝、明治18年、円朝全集2、p.47)4例。『足跡』(徳田秋声)1例。『西洋人情話英国孝子ジョージスミス伝』(三遊亭圓朝)4例。

「つま」

あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか。(『十三夜』樋口一葉、明治28年12月、明文全30、p.129)3例。

『雪の日』(樋口一葉)2例。『泣花怨柳北吹血戦餘塵』(森體訳)1例。『鏡花縁』(尾崎紅葉)2例。『良人の自由』木下尚江)1例。『暴夜物語』(永峰秀樹)2例。『通俗花柳春話』(織田純一郎)28例。

わがつま
良人『鏡花縁』(尾崎紅葉)1例。

「たく」

何卒親類だとも思つて交際して下さいな、良人も熱心に望んで居りますからね。(『夫婦波』菊池幽芳、明治37年1月。明文全93、p.338)1例。

『其面影』(二葉亭四迷)7例。『あたらしい』(内田魯庵)2例。『血ざくら』(内田魯庵)2例。『社会百面相』(内田魯庵)2例。

「あるじ」

それは貴方御自分であるじに左様被仰つたぢやありませんか?(『ヘダ・ガブラア』千葉掬香訳、明治40年1月、明治翻訳文学全集47、p.201)1例。

あるじ
良人(柳川春葉、明治40年7月、リプリント日本近代文学107、p.191)1例。『暗まぎれ』(泉鏡花)3例。

「あにさん」

チョイトあにさん 昨宵泊つた人は何に(『栗太口露笛竹』三遊亭圓朝、明治21年6月、円朝全集7、p.33)1例。

「無訓」

『婦女の鑑』4例。『胡蝶』2例。『捨小舟』1例。『即興詩人』1例。『日本情交之變遷』10例。『帰省』2例。『車掌夫婦の死』1例。『巡禮紀行』1例。『地獄の花』4例。『二人妻』16例。『かしまの女』2例。『つゆのあとさき』3例。『来訪者』1例。『人妻』1例。『老武者』1例。『すつる命』4例。『空の女と実の女』1例。『日本婦人の前途』2例。『茶筌髪』3例。『頸輪』6例。『落紅』2例。『めをと』109例。『損辱』2例。『今様厭世男』3例。『家庭難』12例。『葉ざくら』7例。『横ぐも』1例。『凄涙』6例。『二人巡礼』1例。『あはれ支那人』1例。『悪魔』2例。『結婚場裡之死鐘』1例。『いつの日か君帰ります』5例。『花間の一夢』2例。『新婚後』3例。『妻』6例。『不如帰』8例。

「良人」における大部分の訓は「おっと」であったが、その外にも「ていしゅ・ていし・てえし・こてへし・しゅじん・ぬし・あなた・あんた・つれあひ・つれやひ・やど・うち・うちの・うちのひと・うちかた・ひと・あのひと・おまいさん・おまへ・いろ・エッチ・よきひと・ハズバンド・だんなさま・おやぢ・つま・たく・あるじ・あにさん」のように、多くの訓を當てている。訓としては多様であるが、全般的にその例は少数で、その文脈に合わせたそれぞれの訓を施している。そのうち、管見のところ「ていし・あんた・つれやひ・ひと・あのひと・おまいさん・おまへ・いろ・だんなさま・エッチ・ハズ・ハズバンド・おやぢ・あるぢ・あにさん」などは非常に少い例である。ともあれ、近藤⁶⁾の研究により見られた訓に比べて実に多様な訓があることが分かった。しかし、いくら多様な訓があっても、帰結するところはすべて「おっと」に当たるものといえる。

特異な例として『東京新繁昌記』に「いろ」の訓があるが、内容は客が麦湯で働いている娘に対して話すもので「おっと・だんな」の意味である。また、「エッチ・ハズ・ハズバンド」のような外来語がある。「ハズバンド」の例は問題ないのだが、『破島臺』の例では、飛子の友達である妾が飛子の旦那の自慢話に対して皮肉った内容の外来語である。それで、わざわざ飛子の旦那に対して「エッチ」を使ったというわけで、飛子の「おっと」を指している。「ハズ・ハズバンド」の例からも分かるように、「エッチ」はそこから来ているようである。『日国大』(第2版)の「エッチ」の見出しを見ると、⑨のところには「(英husbandの頭文字)夫をいう、女学生仲間の隠語」とあることから、「ハズバンド」の略字であることが分かる。なお、坪内逍遙や服部誠一の作品には「よきひと・いいひと」の例があるが、一見中国語の「善良的人」の意味のように思われる。実際、坪内逍遙の『妹と背かがみ』の例を見ると、将来自分の娘と結婚させようとしている田沼の容子を見ての判断を述べるころであるが、まだ結婚していない状態であるので「善良的人」になりうる。同じように『文明花園春告鳥』にも見られるが、将来「おっと」になるはずの相手で今は結婚していない「善良的人」をさしている。日本においてはこのような現象は非常に特殊な例といえようが、「よきひと・いいひと」はまだ結婚していない相手であるものの将来の「おっと」としての相手であるので、結局は「善良的人」そのものよりは廣く見て「おっと」の範疇に入れてもいいと思われる。「ひと」の訓も、徳富蘆花の『不如帰』では、未婚の状態であるが結婚の相手としての「ひと」であるので、将来の「おっと」のことを指している。

このように、近代には「良人」が多数用いられていたことがわかった。「おっと」系統の漢

6) 近藤瑞子(2001)『日本近代における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房、p.34

語や漢字表記を用いながらも、日本に比較的遅く流入した「良人」を多用している理由は何だろうか。勿論、近藤瑞子が「単に先の表からだけで推測するならば、仮にこの〈良人〉を「ヲット」としてのみ用い始めたのが『八犬伝』などの読本の類とすると、明治期の作家が作品中で用いた用字は、直接に中国古典から受けたのではなく、日本の江戸文学の影響を大に受けたのだと言える」⁷⁾と述べているように、読本の影響も大きいといえよう。それに加えて、近代には唐話学の影響も無視できないし、漢語流行の時代と相まって、固有語であるにも関わらず出来る限り漢字表記で表そうとする動きもあったと思われる。

「所天」に「所夫」があったように、「良人」と同義の「良夫」が見られる。以下、その例を見てみよう。

「りょうふ」

カレ^{カレ}ヲシテ其某候ノ如キ直^{チヨクジツ}實^{リヤウフ}ノ良^カ夫ニ嫁セシメンコトヲ～(『欧州奇事花柳春話三編』丹羽純一郎訳、明治11年10月、明治初期翻訳文学選、p.100)4例。『新粧之佳人』(須藤南翠)1例。

「おっと」

ただお^{ただお}つと^お お^おつと^つ 唯良^つ夫は良^ま夫らしく妻^{つま}の心^{こころ}を^{いたは}勞つて、(『三人やもめ』北田薄氷訳、明治27年6月、リプリント日本近代文学89、p.133)10例。

『黑白染分靱』(高島藍泉)5例。『化銀杏』(泉鏡花)3例。『おぼろ舟』(尾崎紅葉)1例。『茨木阿滝紛自系』(鈴木金次郎訳)10例。『風流線』(泉鏡花)1例。『可憐鷹』(宮崎湖處子訳)3例。『通俗花柳春話』(織田純一郎)2例。『ロミオ・ジュリエット』(無署名)1例。『海底軍艦』(押川春浪)5例。

「やど」

良^や夫^どが芝居^{しばゐ}を好^すかねば其^{その}楽^{たのし}みはなしといへば、(『夏瘦』尾崎紅葉、明治23年5月、紅葉全集1、p.193)6例。『社会百面相』(内田魯庵)1例。

「つま」

ギオウバンナは良^つ夫^まなく子なき悲みの婦人となりぬ。(『可憐鷹』宮崎湖處子訳、明治25年5月、明治翻訳文学全集50、p.89)2例。『通俗花柳春話』(織田純一郎)2例。良^よ夫^{きつ}『通俗花柳春話』(織田純一郎)2例。

「その他」

不^ふ東^つではござりまするが良^う夫^{ちの}を毎^お夜^と御^お伽^とにさしあげても～(『いさなとり』幸田露伴、明治24年11月、明文全25、p.82)1例。

7) 近藤瑞子(2001)『日本近代における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房、p.34

良夫あなたけ ぶ またく ぼた いじ今日も又久保田が奢めましたか。(『安中草三伝 後開椿名の梅が香』三遊亭円朝、明治18年6月、p.118)11例。

良夫『日本情交之變遷』(宮崎湖処子)4例。『緑蓑談』(須藤南翠)1例。

「良夫」も「良人」と同様に音読みや訓読みがあり、その意味も変わりはない。ただし、「良人」に比べその用例がはるかに少いことが分かるが、文章における表記の多様性としての一役を担っていることが窺われた。

5. おわりに

本稿では、「おっと」を表す漢字表記の「所天・良人」について考察した。中国では古い時代から用いられてきた所謂文言であったが、特に「良人」の場合は中国俗文学で用いられることもあって白話的要素もあった。さらに、両語は「おっと」以外に多義語としての役割をも担っていた。

日本にも比較的早い時期に流入し、中国と同じような意味用法であったと思われるが、時代が下り近世や近代の文学作品では「おっと」の意味用法にかたよっていることがわかる。「所天」と「良人」について整理すると次の通りになる。

「所天」は、辞書から見ると近世の唐話辞書にも登場するが、近世の中国俗文学関係の資料には殆んど見られないので、中国俗語的性格は薄いといえる。その反面、近代になると、当時刊行された漢語辞典においては、まるで流行語のように種々の辞書に登録されていて、漢語として活用されていたことがわかった。ただし、その意味は殆んどが「おっと」とそれに近い意味であった。文学作品の場合は、中国俗文学の影響の大きい曲亭馬琴の読本には多数見られ、読本から本格的に用いられていたと思われる。近代には色々の作家により用いられているが、音読みよりは訓読みの方が圧倒的に多く、面白いことに近世や近代の文学作品では殆んどが「おっと」やその類似表現になっていて、中国語の意味に比べると意味の縮小が見られる。また、「所天」と同義の「所夫」も比較的多く見られるが、意味や用法の上で別段の差は見られなかった。しかし、『日国大』には漢語としての「所夫」の語は見られない。

「良人」は、「所天」と似ていて基本的には同じ様子を見せているが、「良人」の方が使用範

困が広い。「良人」も唐話辞書に見られ、日本人にとって白話語としての認識がなきにしもあらずであったが、やはり量は少かった。しかし、明治期の漢語辞書には多数見られ、「所天」と同様、流行語のように多用されていた。その意味は、やはり「おっと」と「おっと」の類似表現に片寄っていて意味の縮小が見られる。文学作品では曲亭馬琴に多く用いられているが、馬琴作以外の作品にも見られ馬琴の専有物ではなかったことが分かった。「所天」より広まっていたといえよう。近代の文学作品ではかなり多くの作品に見られ、その流行ぶりが分かる。「良人」は漢語としての「りょうじん」も多数あって、「所天」とは異なっている。「良人」の訓としては「おっと」が実に多くの作家や作品に見られ、代表的な訓となっている。外にも「ていしゅ・しゅじん」のような漢語訓や「ぬし・あなた・うち」のような和語訓、少数ではあるが「ハズ・ハズバンド」のような外来語の訓まであるなど、多様な訓が見られるのも特徴であろう。「良人」にも同義の「良夫」があり、意味の上で差は見られないが、相対的に使用例が少い。

日本の近世や近代の文学作品に現れている「所天・良人」は日本に早い時期に流入したが、この時期に花を咲かせた。昭和期以後は徐々に用いられなくなる。問題は、中国では多様な訓があったにもかかわらず、日本では「おっと」系に片寄っていて意味の縮小が見られたことである。このことは、文学の性質上、男女関係の物語が多いことにも起因すると思うのだが、一種の変容ともいえよう。

かなや「夫」のような漢字表記をすれば済むところを、あえて普通の読者には馴染みのない「所天」「所夫」「良人」「良夫」の訓借字を用いることにより、作家の知識を表したり、文学における漢字表記の多様性(豊富さ)を表したりする効果があったものと思われる。

【参考文献】

- 秋元美晴(2002)『よくわかる語彙』アルク
 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院
 近藤瑞子(2001)『日本近代における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房

논문투고일 : 2015년 12월 10일
 심사개시일 : 2015년 12월 20일
 1차 수정일 : 2016년 01월 08일
 2차 수정일 : 2016년 01월 14일
 게재확정일 : 2016년 01월 19일

<要旨>

近世・近代に於ける「所天・良人」について

本稿では、「おっと」を表す漢字表記の「所天・良人」について考察した。中国では古い時代から用いられてきた所謂文言であったが、特に「良人」の場合は中国俗文学で用いられることもあって白話的要素もあった。さらに、両語は「おっと」以外に多義語としての役割をも担っていた。

日本にも比較的早い時期に流入し、中国と同じような意味用法であったと思われるが、時代が下り近世や近代の文学作品では「おっと」の意味用法にかたよっていることがわかる。

日本の近世や近代の文学作品に現れている「所天・良人」は、この時期に花を咲かせた。昭和期以後は徐々に用いられなくなる。問題は、中国では多様な訓があつたにもかかわらず、日本では「おっと」系に片寄っていて意味の縮小が見られたことである。このことは、文学の性質上、男女関係の物語が多いことにも起因すると思うのだが、一種の変容ともいえよう。

かなや「夫」のような漢字表記をすれば済むところを、あえて普通の読者には馴染みのない「所天」「所夫」「良人」「良夫」の訓借字を用いることにより、作家の知識を表したり、文学における漢字表記の多様性(豊富さ)を表したりする効果があつたものと思われる。

About 'Syoten,' and 'Ryoujin,' in Edo-Meiji

This paper purports to make a fuller scrutiny of [Syoten][Ryoujin] which are Chinese characters representing the "husband". Although these characters were so-called written language which had been used from ancient times in China, [Ryoujin], in particular, had a colloquial Chinese element partly employed in China popular literature. Furthermore, [Syoten][Ryoujin] had also played a role as a polysemy having multiple meanings other than "husband".

These words flowed into in Japan at relatively early times, and appeared to have a similar semantical usage with China. However, as times went on, they were inclined to mean "husband" at large in early modern and modern literatures.

[Syoten][Ryoujin] were blooming in the literary works of Japan's early modern and modern times, but falling off gradually after Showa period. The problem is that although there were various meanings in China and Japan, their meaning was reduced to the semantical resister of the "husband". This is likely to be brought by the fact that the main storyline of literary works centers around the relationships between men and women. But this semantical phenomenon can be a kind of cultural transformation. This paper argues that by using the borrowed unfamiliar characters like [Syoten][Syohu][Ryoujin][Ryouhu] instead of Kana and a Chinese character such as [夫], Japanese writers intended to show up their knowledge and thereby to pursue a variety of notation of Chinese characters.